

1. 風邪事件

「ママ、嫌い！」

清子がそう言つて、よく部屋に閉じ籠ります。もう何度目でしょうか。私は、何度教えても覚えてくれないので、「どうして分からないの！」と、言つてしまいます。すると、いつもこうなりました。「ママ、嫌い」と言われて、私はその都度、自分の犯した罪にさいなまれました。あの日、私が気を付けてさえいれば清子をこんな子にさせずに済んだからです。

私は、斉藤清子の母の斉藤保奈美といいます。夫の邦孝と酒屋を営んでいます。

清子は小さいころからとても活発な子でした。いつも、お店に居てお客さんと話をする。うちの看板娘で、近所ではちよつと有名な子でした。

「西さん。また酔っぱらっているの？」

清子が聞きます。西さんというのは近所に住む大工の西田さんです。独身で、休みの日は決まつて朝から酒を飲んでいました。そして、近所をふらついているので有名な人でした。朝昼晩と一日三度以上もお店に来て酒とつまみを買つては、店の中で世間話をしながら飲んでいました。「おじさんはね。いつも一生懸命働いているから、休みの日は、お酒飲んでいいの！清子ちゃんは、学校へ行かなくていいの？」

西田さんは、清子に言います。

「今日は日曜日だよ。学校は休みです。でも清子は、お酒飲まないよ」

「あはは、子供はお酒飲んじやだめだ」

「そんなことないよ。時々飲んでるもん。ほら、これを見て」

清子は、『子供のお酒』というジュースを見せる。西田さんは『こりや、いいねえ』と笑う。

「チョコレートを食べながら飲むとおいしいんだから」

「ほほう。通だな」

西田さんが、その『子供のお酒』を取ろうとすると、清子はその手をはたく。

「大人は飲んじや駄目なの！」

清子は、本当のお酒は子供が飲んじや駄目なんだから、子供のお酒は大人が飲んじや駄目だと説明する。これで公平なんだという。

「しつかりした子だね。誰に似たのかな」

よく、西さんはこう言っていました。

冬は、お店にストーブがあつて、そこでスルメなどを焼いていました。すると、近所の人たちが集まってきました。お店は、ひとつの社交場でもありました。

しかし、清子が小学校3年の冬のことでした。

私たち夫婦は忘年会のシーズンに入り、とても忙しい日のことです。朝から仕入れと配達・回収に追われていました。

「ママ、頭が痛い」

清子がそう言うので、私は、額に手をあてました。熱がありました。風邪のようです。病院へ行く時間を考えましたが、配達を一旦終えてからと思いい、とりあえず、学校を休ませ、風邪薬を飲ませて、寝かせました。

その日は、異常にお店が忙しくて、いつの間にか清子の事を忘れてしまいました。

午後2時頃、夫が「腹減った」というので、お昼の支度をしようとして清子を思い出しました。

慌てて清子の様子を見に行ったところ、汗をびっしょりかいて、呼吸に喘いでいました。意識がほとんどない状態でした。

私は、急いで病院へ連れて行きました。しかし、医者が言います。

「どうして、こんなになるまで放っておいたのですか。危うく死ぬところでしたよ。今も非常に危険な状態です。助かっても脳に障害が残るかも知れません。覚悟しておいてください」

私は泣いてしまい、話ができませんでした。

「我慢強い子ですよ。こんなになるまで、お母さんとお父さんの邪魔をしてはいけなと思ったのでしよう」

その通りです。我慢強い子にしたのは、私たちです。店が忙しいときには、清子がお腹減ったとかいっても我慢するよう言っていたのです。清子も最近は本当に我慢強くなってしまうって、夕飯も食わずにテレビをつけたまま寝てしまうことが何度もありました。

私は、電話でパパに清子が入院することを伝えました。

「そうか。分かった。店の方は、忠史君が配達を手伝ってくれているから、心配するな」と、パパが言いました。

忠史君というのは、お向かいの自動車修理工場の中村さんとその息子さんで、昔から近所付き合い合っていました。忠史君のことは、生まれたときから知っていました。時々、お店で短期間のアルバイトをしてもらっていました。清子も、何度も会ってはいましたが、10歳も離れていると、一言二言話すだけでした。

それから、私は清子のそばを離れませんでした。でも、清子は何時間経っても目を覚ましません。夜になって、看護師が来て私に言います。

「お母さんまで倒れると大変だから、休憩室の簡易ベッドで休んでください。お子さんは私たちが看ますから」

「ありがとうございます。でも、ここにいます」

親切に言つて頂いたのですが、私は、自分自身に罰を与えたかったので、寝ないで看病しました。朝になると、熱がひいたようでしたが、目を覚ましませんでした。

私はいつの間にか最悪の事を考えていました。このまま目を覚まさずに植物人間になつてしまふ。それは私のせいです。私は自分を責めました。清子が元気になるのなら、私が身代わりになつて死んでもいいと思ひ、清子のベッドで泣きました。

お昼頃、パパと忠史君が病院に來ました。パパは清子の姿をまともに見れません。おそらく、泣いてしまふのが怖かつたのでしよう。パパは、私が頼んだ物が入っているカバンを渡すと、廊下に出てしまいました。

忠史君は、清子の枕元に來て言いました。

「頑張つて早くよくなれ。ぼくもパパもママも皆で応援しているよ。そうそう、スーパーヨーヨーができるようになったんだつて。凄いね。今度は、ぼくと競争だね。犬の散歩とか、ブランコとか、技を覚えないとね」

忠史君が言いました。昏睡状態でも声が聞こえるというのです。私はそれを聞いて恥ずかしく、また清子に申し訳ない事をしていたと反省しました。私は、この数時間、清子には泣く声ばかり聞かせていました。忠史君のように前向きにならなければと思いました。

パパと忠史君は1時間後には帰って行きました。私は、忠史君が言うように、色々な事を話しました。清子が生まれた頃の事や、幼稚園での出来事などを清子に話しました。その日、1日が非常に長く感じました。

3日目の朝、私がふと清子を見ると、清子は目を覚ましていました。私を見ているのですが、ぼーっとしたままです。私は嬉しくて清子を抱きしめたのですが、清子の反応はありませんでした。

医者が来て診察しました。言葉は理解しているようで、頷くのですが、言葉が出ません。自分の名前も母の私の顔も分からないのです。

「もう大丈夫でしょう。ただ、脳に何らかの障害があるのかも知れません。回復する可能性もありますので、落胆なさらずに、今までのように接してください」

医者は、施設を紹介すると言い出しましたが、私は、清子を退院させて家に連れて帰りました。

2. クッキー事件

それから、清子は、学校へも行けなくなりました。私は、清子に付きつきりで、文字の読み書きや数字や計算など、幼稚園児に教えるように色々な事を教え直しました。でも、1日で覚えられないのは少しだけです。

「どうして分からないの！」

私がイライラすると、清子は、すぐに、「ママ、嫌い！」と言つて、自分の殻に閉じこもってしまいました。

お店には、以前のように人が集まることになりました。時々、西さんが来てもすぐに帰って行きました。お店の奥で騒ぐ清子の声が聞こえたら、「大変だね」としか言えません。その後、会話になりませんからね。西さんも我が子のように可愛がっていましたから、その声を聞くのがとても辛かったんだと思います。

障害を負ってから、半年後、福祉センターの中にある同じような障害を持つ子たちがいる学級に入る事ができました。でも、なかなか、学級に馴染めませんでした。スタッフの方には本当に御苦勞をかけたと思います。

ある日、学級でクッキーを作ってきました。清子が得意になって、言います。

「このクッキーね。清子で作ったの」

私とパパは、それを食べました。とても苦くて変な味がしました。

「おいしいよ」

パパが言いました。

「うん。おいしいね」

私もそう言いました。しかし、清子は涙目になって「嘘つき！」と言って怒りました。

丁度そのとき、忠史君がお酒を買いに来ました。清子の姿を発見すると、こう言いました。

「清子ちゃん、何で泣いているの？」

「お兄ちゃん、清子で作ったクッキー食べてくれる？」

「うん。いいよ。頂きまーす。」

忠史君はクッキーを食べました。決しておいしいものではありません。

「うん。うまいね。清子ちゃんは料理が上手だね」

忠史君もお世辞で言っているものと思いましたが、清子がそれを聞いてとても喜んだのです。

今、考えると、清子の特別な能力は、人の心を感じることができたのです。そのとき、私たち

は「おいしい」と嘘を言いましたが、忠史君は本当におしかったようです。

清子の喜びようは半端なものではありませんでした。他人に喜んでもらえたのです。この1年間、清子は誰からも煙たがれた存在でした。その特別な能力を使いたくなくても、そう感じたこととでしょう。凄く辛かったと思います。人間だれしも誰かのために生きるものと思います。清子は、その日、忠史君という生きる目標が見えたのでしよう。

次の日から、学級に行つても積極的に色々な事をやりました。家に帰ると、料理の本を開いて、私に料理を教えると言うのです。忠史君に食べてもらおうと言って、忠史君の家にも何度か運びました。とても明るくなりました。忠史君のお陰です。

「清子ね。よく覚えられないの。でもね、おじさんの名前は、西さんです」

「ピンポン正解！」

西さんは、目にうつすらと涙を浮かべて喜んでいました。西さんが久しぶりに清子に会ったとき、「おじさんのこと分かる？」と言いましたが、清子は泣き出して答えられなかったのがショックだったと話していました。でも、今は、積極的にお店に出てきて、お客さんと話すようになり、お客さんの名前を頑張って覚えられました。

「正解したから、おじさんから賞品をあげよう。チョコレートがいい？」

「西さん、そういうのは止めてください」

パパが言います。

「何言ってるんだい。清子ちゃんの快気祝いだよ。俺の気持ちだよ」

「そう言ってる、もう、何度も頂いてますから、もう勘弁してください」

パパも嬉しくて仕方ないようでした。

「清子のお菓子箱は、今、一杯なの。チョコレート入らないの」

清子は、食事のとき、あまり食べません。せめて、お菓子とかでカロリーをとって貰わないと体力が付きません。それで、いつでも食べられるようにと、清子には、「お菓子箱」をあげました。それを知って、近所の人清子のお菓子箱をいつもチェックしていて、空きがあると、お店でお菓子を買って、そこから数個取り出してお菓子箱に入れるのです。パパが「止めてください」と言っても駄目でした。

「どうもありがとう。えっと、畠のおばさん」

近所の畠さんも清子が心配で時々来てお菓子を入れる人でした。名前を憶えてもらって嬉しそうです。

「なかなか減らないねえ。うちなんか、数分で無くなるわよ」

畠さんはそう言って笑います。畠さんの子供は男の子ばかり3人いて、お菓子なんか買っ

てくると取り合いの兄弟喧嘩が始まると言います。『天使の分け前』とか言つて、清子のお菓子箱にお菓子を入れるのです。『天使の分け前』はウイスキーの話ですが、そんなことどうでもよくて、本当に清子の笑顔は天使のようだというのです。

清子は、忠史君が家にいることが判るようで、決まつて、その時間に料理を作り始め、忠史君に届けるのです。クッキーや、ケーキや、餃子など、色々なものを作つて運びました。

「清子。どうだった？」

パパが清子に聞きます。すると、清子が答えます。

「お兄ちゃんね。次は頑張つて。だつて。」

忠史君は、すべて「うまい」と言うことはないようで、時々、清子があつかりして帰ることもありました。

「清子。頑張る。ママみたいに上手になるんだから」

でも、忠史君は喜んでるのは間違いないみたいです。「頑張つて」と言われるのが、この上なくうれしいみたいです。

3. 忠史君の彼女

ある日、清子が部屋で騒ぎ出したのです。何事かと思ひ聞いてみると、

「お兄ちゃんが泣いているの」

と言うのです。お兄ちゃんというのは、忠史君のことです。大学卒業が間近となった日でしたが、卒業式で泣いているとは思えなかつたので、私は、清子を店に残して、中村さん宅を訪ねました。

「これは、なかなか手に入らない洋酒ですが、忠史君の卒業祝いです」

私が、清子が騒いでいるから様子を見に来たなどとは言えないので、いつも店を手伝ってくれるお礼だと洋酒を持参しました。すると、忠史君の母親が言います。

「いつも気を遣ってもらって、すみません。今、忠史を呼んでお礼を言わせたいところなんです
が、あいにく・・・」

忠史君は、付き合っていた彼女が浮気をしたので、今、別れたばかりだということです。さつきまで、彼女が玄関に来ていたといふのです。

「私も、あんな子とは付き合わない方がいいと何度も言ったんですよ。どこのお嬢様か知らないけど、うちの夕飯に招いたときなんか、あたしが作った餃子を見て『うちはXX飯店の餃子しか

『食べない』とか言って、一口も食べなかったんですから」

私は複雑な気持ちでした。清子は純粹に忠史君の幸せを望んでいます。しかし、私には、忠史君にはうちの清子がふさわしいのではないかと考え始めていたので、彼女と別れて嬉しく思っている自分がいたのです。

「大学の同じサークルで知り合ったとかで、とにかく夢中だったようだけど。懲りたでしょ。少しは女の見方を学習したでしょう」

忠史君の母は、よほど嫌いなタイプだったようでした。「それじゃ、うちの清子の方がいい？」と言おうとしましたが、止めました。忠史君という大学生と幼稚園児のような清子が吊り合う訳がありません。

4・合コン

忠史君はマエバラ工業に入社し、立派な社会人になりました。清子は未だ中学生でした。でも、いずれ二人は結ばれるのだと思いました。

忠史君は、会社の仕事と趣味で大忙しでした。時々、清子が料理を持っていきました。

「お兄ちゃんね。犬のロボットを作っているの。おすわりつて言うとお座りするの。とっても可愛いのに」

清子が忠史君の部屋で見て来た事を嬉しそうに話しました。

ある夜、清子が騒いだのです。

「お兄ちゃんが、女の人と・・・」

清子を感じているのは、忠史君と新しい彼女とのことだと思いました。神様は残酷です。こんなに心が綺麗な清子に、なんでこのような能力を授けたのでしょうか。中学生といえば子供と大人の境目で多感な時期です。女と男を意識し始める年頃です。清子も最近、鏡を見て自分の髪型を気にしたりしていました。脳の障害があっても恋愛感情はあるのです。私は清子を抱きしめると、泣きながら眠りました。

次の朝、お店の前を掃除していると、朝帰りする忠史君に会いました。会社の仕事で徹夜して朝帰りすることがあったので、いつもなら、『おはよう』と声をかけるのですが、その日は、声が出ませんでした。顔も見たくなくなかったです。彼女ができてよかったと思うのが普通なのでしようが、どうしても、私は悔しくて笑顔にはなれませんでした。

清子が起きてきて私に言いました。

「今日はお兄ちゃんに料理を持っていくの」

私は絶句しました。でも、清子の笑顔に、私は負けました。

そうなんです。清子は純粋に忠史君の幸せを望んでいるのです。それは忠史君に彼女ができて変わることはないのです。私は、料理を作りながら、清子だけが好きになるように料理に魔法をかけたと思います。それが駄目なら、いつそのこと毒を入れて殺そうかとさえ思いました。

あの夜から、清子は騒がなくなりました。忠史君が彼女と会っていないのか、それとも清子が忠史君と彼女が会っているときは考えないようにコントロールできるようになったのか、疑問に思っていました。忠史君の母親と、立ち話したついでに聞いてみました。

「この前、朝帰りしたようでしたけど、彼女でもできたの？」

「ええ、合コンだとかで朝まで飲んで、朝帰りしたけど。さあ、彼女なんていないと思いますよ」
女の勘だと言うけど、母親だから分かるのでしよう。もしかしたら、清子は、あの日の朝には、
既に分かっていたのかも知れません。

私は泣くほど安堵しました。他人の不幸を泣いてまで喜ぶなんて、私は、なんて醜い人間でし
よう。

5. 誕生プレゼント

清子の13歳の誕生日に、忠史君はお店にやってきました。

「お誕生日おめでとう。いつもの料理のお礼だよ」

忠史君は、そう言っ、清子にプレゼントを渡しました。清子は固って、何も言いません。

「どうもすみません。ほら、ありがとうございますよ」

私が清子にお礼を言うようにいましたが、固まったままです。

「じゃあ、ぼく、急いでいるので」

忠史君は、帰って行きました。

「清子。なんで、お礼を言わなかったの？」

私は清子を見ると、プレゼントの箱を潰れそうになるくらい強く抱いていました。その後、清子は大声で泣いたのです。私もパパもびっくりしました。私も嬉しくて泣きました。

清子は、プレゼントを大事に抱えて、自分の部屋に入りました。そのため、私たちはプレゼントの中身を見ることができませんでした。

夕食のとき、清子に聞きました。

「お兄ちゃんからのプレゼントは何だったの？」

「小さなロボットだよ」

「へえー、パパに見せてくれる？」

「だめ！」

清子は、プレゼントの中身を、私たちになかなか見せてくれなかったのです。小さなロボットだと言うのが忠史君らしいなあと思っていました。

清子が留守のとき、お店に来た忠史君にプレゼントのことを聞きました。

「清子が、小さなロボットを貰ったって喜んでいましたよ。それも、私とパパには、一度も見せてくれなくてね。本当に嬉しかったんだと思います」

「そうですか。でも、ロボットじゃなくて、単なるオルゴールなんですけど」

「えっ。そうだったの？動かし方知っているのかしら」

「動かし方の手紙を添えたので大丈夫だと思いますよ。ひらがなは読めましたよね。あ、ゼンマイが解らないか。いや、ゼンマイとは書かなかったな」

忠史君が心配になってきたと言って帰って行きました。

私は、もし、動かし方を知らなかったら可哀相だと思って、清子が帰って来たとき聞きました。

「清子。お兄ちゃんからのプレゼントのロボットは動かせるの？」

「少しだけなら見せてもいいよ」

清子が言うので、初めて見ました。箱の後ろに付いているゼンマイを少しだけ巻いて、箱のふたを開けます。すると、箱の中の妖精がゆっくり回りながら、何か曲を演奏するのですが、曲名が分かる前に止まってしまいます。

「はい。終わり」

清子は、これ以上見せてくれません。見ても減るものじゃないのでしようが、清子にしてみれば自分だけの物にしておきたいのでしよう。